[illegible]平

観世流改訂謡本

内 二

二番目

兼平（カネヒラ）

四月

シテ　兼平（前ハ老船頭）
ワキ　僧

ワキ次第上（ヨワク）

「始めて旅を信濃路や。始めて旅を信濃路や。木曾のゆくへを尋ねん

これハ木曾の山家（ヤマガ）より出でたる僧にて候。偖も木曾殿ハ。江州（ゴオシウ）粟津が原にて果（バ）て給ひたる由承り及び候程に。かの御跡（オンナゴ）を弔（トムライ）ひ申さばやと思ひ。唯今

道行上

信濃路や。木曾のかけ橋名にしおふ。木曾のかけ橋名にしおふ。其跡とふや道のべの草の陰野の假枕。重ねつゝ日も添へて。ゆけば程なく近江路や。矢橋の浦に着きにけり矢橋の浦に着きにけり

シテ一セイ上

ツヨク

世の業の憂きを身につむ柴舟や。

焚かぬ前より。こがるらん　「ワキ のう〱
其船に便船申さうのう　「シテ これは山田
矢橋の渡し舟にてもなし。御覧候へ柴
積みたる舟にて候程に。便船は叶ひ候
まじ　「ワキ こなたも柴舟と見申して候へ
ども。あまりに渡りに舟もなし。出家の事
にて候へば別の御利益に。舟を渡して

たび給へ、シテ下 げに〱出家の御身

なれば。餘の人に異り給ふべし。げに

御経にも如渡得船。上 舟待ちえたる

旅行の暮。シテ かるもとりも船。近江の海の

シテワキ二人上 矢橋を渡る舟ならば。それは旅人の渡舟

あり。地上歌 これは又。浮世をわたる柴舟の。

浮世をわたる柴舟の。乾されぬ袖も

●小謡

水馴棹の。見なれぬ人なれど。法の人
にてましませば。船をバいそで惜むべき
とく〳〵めされ候へ〳〵めされ候へ。
ワキ詞 いかに船頭殿に申すべき事の候。見え
渡りたる浦山ハ皆名所にてぞ候らん
御教へ候へ シテ さん候皆名所にて候。
御尋ね候へ教へ申候べし ワキ まづ向ひな

當つて大山の見えて候は。比叡山候か

シテ「さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社。茂りたる峰は八王子。戸津坂本の人家まで残りなく見えて候

ワキ「偖あの比叡山は。王城より丑寅に當つて候よなう

シテ「なか〱の事それ我が山は。王城の鬼門を守り。悪魔を拂ふのみ

ならずで。一佛乘の嶺と申を傳へ聞く
鷲の御山を象れり。又天台山と号する。
震旦の四明の洞をうつせり。傳教
大師桓武天皇と御心を一つにして。
延暦年中の御草創。我たつ杣と詠じ
給ひし。根本中堂の山上まで。殘りなく
見えては。さて大宮の御在所橋殿

とやらんも。あの坂本のうちにて候ふ

シテ「さんわう樹下に當つて。まそこし木深き影の見え候こそ。大宮の御在所橋殿まで御のり候へ

ワキ「ありがたや一切衆生悉有佛性如来と聞く時は。われらが身までも頼もしうこそ候へ

シテ「仰のごとく佛衆生通ずる身なれぞ。お僧もわれも隔はあ

ら。一佛乗の峯には遮那の梢を並べ
麓ハ止観の海を湛へ又戒定慧の
三學を見せ三塔と名づけ人ハ又
●一念三千の。機を現して。三千人の衆
徒を置き圓融の法も曇なき月の
横川も見えたりや。さて又麓ハさゞ波や。
志賀辛崎の一つ松。七社の神輿の

幸の棹なるべし。さゞ波の水馴棹こぎ
れゆく程よ。遠かりし。向ひの浦浪の。
粟津の森ハ近くなりてもとハ遠きさゞ
波の。昔ながらの山桜ハ青葉にて。面影
も夏山のうつりゆくや青海の。柴舟の
志ばしも。暇ぞ惜しきさゞ波の寄せよ
寄せよ磯ぎはの。粟津よ早く著きよ

けり。粟津に早くつきにけり。中入

ロ上歌 待謡

露をかたしく草筵。露をかたしく草筵。日も暮れ夜にもなりしかば。粟津の原のあはれ世の。ときをかけいざや弔はん。ときをかけいざやとむらはん。

後シテ上 一声 ツヨク

白刃骨を砕く苦み。眼睛を破り。紅波楯を流しまた粧ひ。築杭に殺花を乱して

一セイ上
〽地 雲水の。粟津の原の朝風に。鬨つくりそふ声〻に。
シテ 〽修羅のちまたハ。騒がしや
〽げにや粟津の原の。草枕に。甲冑を帯し見え給ふハ。いかなる人にてましますぞ
シテ 〽おろかと尋ね給ふものかな。御身これまで来り給ふも。我亡き跡をとはん為の。御心ざしにて

ましまさずや。兼平これまで参りたり
ワキ「今井の四郎兼平ハ。今ハ此世になき人なり。偖ハ夢にてあるやらん
シテ詞「いや今見る夢のみか現にもはや。水馴棹の。舟にて見えし物語。早くも忘れ給へりや
ワキ上「そもや舟にて見えしとハ。矢橋の浦の渡守の
シテ詞「其舟人こそ兼平が。現に見え

えゝ姿なれ ワキ上 されバこそ始より様ある
人と見えつるが。さてハ昨日の舟人ハ
シテ 舟人にもあらず ワキ 漁夫にも シテ あらぬ
地上歌 もの〻ふの。矢橋の浦の渡守。矢橋の浦
の渡守と見えつるハ われぞかし同じくハ
此舟を。法の舟にひきかへて。われをも又
彼岸に。渡してたばせ給へや クリ上 げにや

●獨吟サシクセ

有為生死のちまたに。来つて去る事早し。老少もつて前後不同。夢幻泡影。いづれならん

シテ「唯これ槿花一日の榮。

地「弓馬の家にすむ月の。わづかに残るつはもの。七騎となりて木曽殿は。此近江路より落給ふ

シテ「兼平瀬田より參りあひて

地「又三百餘騎になりぬ

シテ「その後

合戦度〻にて。又主従二騎に討なさる

地「今は力なし。あの松原に落ち行きて。御腹召されよと。兼平勧め申せば。心細くも主従二騎。粟津の松原さして落ち給ふ　兼平申すやう。後より御敵。大勢にて追つかけたり。防ぎ矢仕らんとて。駒の手綱を返せば。木曽殿仰せ

ありける。多くの敵を逃れしも。汝一所にあらざるやの。所存ありつる故ぞとて同じく返し給へば。兼平又申すやう。とは口惜しき御諚かな。さまでぞ木曽殿の。人手にかかり給はん事。末代の御恥辱。ただ御自害あるべし。今井もやがてまゐらんとの。兼平よいさめられ。又引つ返し

落ち給ふ。さて其後よ木曾殿ハ。心細くも
唯一騎。粟津の原のあなたなる。松原
さして落ち給ふ 頃ハ睦月のまつ方
地 春めきながら冴えかへり。比叡の山風の。
雲行く空もくれはとりあやしや通路の。
末白雲の薄氷。深田よ馬を駆け落し。
引けどもあがらず打てども行かぬ望月の。

駒の頭も見えぞこそこれ何となからん
身の果せん方もなくあきれはてゝ。此まゝ
自害せばやとて。刀に手を掛け給ひしが。
さるにても兼平が。行くへいかにと遠方の
あとを見かへり給へば いづくより来り
けん 今ぞ命は槻弓の。矢一つ来つて
内甲にからりと射る。痛手にてまします

●仕舞

せず。たまりもあへず馬上より。をちこちの
土となる所はここぞわれよりも。主君の
御跡をまづ弔ひてたび給へ・ロンギ上げに
痛はしき物語。兼平の御最期は。何とか
ならせ給ひける　・シテ上兼平はかくぞとも。
知らで戦ふ其隙にも。御最期の御供を。
心にかくるばかりなり　地上さて其後に思も

ぎも。敵の方に聲立てゝ シテ「木曾殿討たれ給ひぬと 地「呼ばゝる聲を聞きしより シテ「今は何をか期すべきと 地「思ひ定めて兼平は シテ「これぞ最期の廣言と 地「鐙踏んばり シテ「大音あげ木曾殿の。御内に今井の四郎 地「兼平と。名のりかけて。大勢に。割つて入れば。もとより。

一騎當千の。秘術を現し大勢を。粟
津の汀に追つめて磯打つ波のまくり
切り。蜘手十文字に。撃ち破り。驅け通
つて。其のち。自害の手本にとて。太刀を
銜へつゝさかさまに落ちて貫かれうせ
にけり。兼平が最期のしぎ目を驚か
すありさまなり目を驚かすありさま。

文學博士 井上賴圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

使用家の特權

觀世流改訂謠本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝幀料は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謠本を得らるべく候

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正七年八月二十日印刷
大正七年八月三十日發行

（大正版 一番綴）

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路二丁目九番地 土居鐐太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路二丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

去聲

手

觀世流改訂謡本

内 二

三番目

千手

三月

ツレ重衡
シテ千手
ワキ宗茂

ワキ詞 これハ鎌倉殿の御内に。狩野の介宗茂にて候。偖も相國の御子重衡の卿ハ。此度一の谷の合戦にて生捕られ給ひて候。某預り申して候。朝敵の御事と申しながら。頼朝痛ハしく思しめされ。よく痛ハり申せとの御事にて。昨日も千手

の前と遣されて候。かの千手の前と申
すハ。手越の長が女にて候が。優にやさし
く候とて。御身近く召し使はれ候を遣
され候事。真にありがたき御心ざしにて
御座候。けふハ又雨中御つれづれ。酒を
勧め申さばやと存候

シテ次第上
琴の音添
へて音づるゝ。琴の音添へて音づるゝ

これやあづまやあるらん　それ春の
花の樹頭に榮え。秋の月の水底に沈
むも。世のはかなきの有様を見ても哀
や重衡の。其いにしへハ雲の上。かけても
知らぬ身のゆくへ浪に漂ひ舟に浮き。
さらばよるべの。よそならで。ありしまかへる。
有様かな　都にだにも留めぬ御涙

（上歌）あるを痛ましや・陸奥の。忍ぶに堪へぬ雨の音。忍ぶに堪へぬ雨の音。降りまさりたるけしきも。思の露も。散りぢりに心の花もしをれしとしをれて袖の色までも。けふの夕べの。たぐひかな。けふの夕べのたぐひかな・いかに案内申候はん

ワキ「誰にてわたり候ぞ

シテ「千手

の前に參りたる由それ〳〵申候へ

ワキ「暫く御待ち候へ。御機嫌をもつて申さうずるまでは。

ツレサシ上「身はこれ槿花一日の榮。命は蜉蝣の定めなきに似たり。心は蘇武が胡國に捕はれ。巖窟の内に籠められて。君邊を忘れぬ志。それはやうやうに謀りて。敵を亡ぼし舊里に

あはざかりはざる事なれども。唯こなたへと請ざれば其時千手立ちよりて

地上歌

妻戸をきりゝと押しひらく。御簾の追風匂ひくる。花の都人は。恥かしあづら見えん。げにや東のはてしまで。人の心の奥深き。其情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。誰が思ひでとなりぬらん。

よらぞとこそいひつれトモ

ツレ詞 いかに千手の前。きのふあからさまに申しつる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ

シテ さん候其由申して候へば。朝敵の御事なるを私として出家を許し申さんこと思ひもよらずとこそ候ひつれ。わらはも御心のうちおしはかり参らせて。いかほどこまごまと申し

て候へども。かゝる出家の本望。痛わ
しうこそ候へ　口惜しやわれ一の谷まで
いかにもなるべき身の。生捕られ。今は東
のはてまでも。かゝるうき面をさらすこと。
前世の報と云ひながら。又思へども
父命より。佛像をほろぼし。人壽を
たちし。現當の罪を果すこと。前業

蔵ハ 父命 スミテモ

より猶恥かしうこそ候へ（シテカヽル上）げよく

これは御理りさりながら。かゝる例はいに

しへ今も多き習と聞くものを。獨とな

歎き給ひそとよ（ツレ）げよく慰め給へ

ども。たぐひはあらじ憂き身のはて

（シテ）昨日は都の花と榮え（ツレ）けふは東の春

まで（シテ）うつり變れる（ツレ）身の程を

地上歌

思へたゞ。世は空蟬の唐衣。世は空蟬の唐衣。きつゝ馴れにし妻しあれば。都の雲居を立ち離れ。はるばる来ぬる。旅をしぞ思ふ衰への。憂き身の果ぞ悲しき。水行く川の八橋や。蜘手に物を思へとや。かけぬ情のをりをりに馴るゝや恨なるらん馴るゝや恨なるらん。

ロキカヽル上

今日の雨中の夕べの空。御つれ〴〵を

慰めんと。樽を抱きて参りて候。既に

酒宴を始めんとて　シテ千手も此よし

見るよりも。御酌に立ちて重衡の。御前

にこそまゐりけれ　ツレ今いとうしらはぞ

かりの。心ならずよ思はずも。手まづさえ

ぎる盃の。心ひとつよ思よ思　それ〴〵

いかま何までも。御肴(サカナ)ときこゆれば

シテ「其時千手とりあへず 羅綺(ラキ)の重衣(チヨウイ)

たる。情(ナサケ)なきことを機婦(キフ)にねたむ

シテワツレキ三人「唯今詠(エイ)じ給ふ朗詠(ロウエイ)は。かたじけなくも

北野(キタ)の御作(サク)。此詩を詠(エイ)ぜば聞(キ)く人ま

でも。守るべしとの御誓あり　ツレ「さりな

がら重衡ハ今生(コンジヤウ)の望(ノゾミ)なし　三人「唯来世(ライセ)

の便こそ聞かまほしけれと宣へバ

シテ「わらハ御經をうけたまハり十悪といへども。引攝すと

地「朗詠してぞ。かなでける

シテクリ上「倩も彼の重衡ハ。相國の末の子と申せども。兄弟にも勝れ。一門にもことえて。父母の寵愛限なし

●獨吟サシクセ

シテサシ上「●されども時うつり。平家の運命ことごと

とく 月の夜すがら聲たてゝ。啼くや
牡鹿の津の國の。生田の川よ身を捨
てゝ防ぎ戰ふと申せども　森の下風
まの葉の露 落されけるこそあはれ
あはれ。今は梓弓。よし力も 重衡も。
ひらんとするよいづ方も。網を置きたる
ごとくみて。逃れかねたる淀鯉の。生捕ら

れてありて憂き身をうろくづの其
まゝよ。沈み果てずして。名をこそ流せ
川越の重房が手に渡り心の外の都
いり。げにや世の中は定なきならひ
神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆
徒の手にわたりなばとにもかくにも果ては
せで。又鎌倉にわたさるゝ。こゝはいづくぞ

八橋の。雲居の都。とゝまた。三河の
國や遠江。足柄箱根うちすぎて。明け
もやすらん星月夜。鎌倉山よりし
かば。憂き限ぞと思ひしよ馴るれば
こゝも忍び音よあはれ昔を思ひ妻の。
ともし火暗うしては數行虞氏が
涙の。雨さへ赤きる夜の空　四面よ楚

歌の聲のうち　地 何とかへさて舞の袖。
思の色にや出でぬらん涙を添へて
めぐらすも。雪のふるえの枯れてだに
花咲く。千手の袖ならば。かさねていざや
かへさん・忘れめや　序ノ舞　シテワカ 一樹の陰や。
一河の水　地 皆これ他生の縁といふ。
白拍子をとぞ歌ひける　ツレ ●其時重衡

興に乗じ。其時重衡興に乗じ。
琵琶をひきよせ弾じ給へばまた
瓊琴の。緒合せに合せて聞けば
峯の松風通ひ来にけり。琴を枕の
短夜のうたたね。夢も程なく東雲も
ほのぐと。明け渡る空の　あさまま
まやありぬべき　あさまにやあり

なんと。酒宴をやめ給ふ御心のうちぞ
痛はしき かくて重衡勅よりで。
かくて重衡勅よりで。又都へとあり
しかば。もののふ守護し出で給へば
千手も泣く泣く立ち出でて何となく
の憂き契。はやきぬぐよ。しろきはな
る袖と袖とのつゆ涙。げに重衡の

ありさま目もあてられぬけしきかな
目もあてられぬけしきかな。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

發行所
東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せられなば、裁り所は無料にて五番綴の美本に仕立直し速返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

著作權所有

大正六年十一月廿日印刷
大正六年十一月廿五日發行

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町二丁目一番地 七條式金屬版印刷所

大正本 一番綴